

こらっせ便り

2023年3月25日

【編集・発行】「福島子ども・こらっせ神奈川」

TEL : 045-353-9008、 eメール : info@korasse-kanagawa.org

Web サイト : <http://korasse-kanagawa.org/>



2023年度へキックオフ！

福島子ども・こらっせ神奈川事務局長 遠野はるひ

桜の開花が告げられるこの頃は、2023年度の賛同をお願いする時期でもあります。「こらっせ」は2012年4月にスタートしたので会計年度は4月から翌年3月までです。従来は夏のリフレッシュプログラムのみへの賛同をお願いしていましたが、コロナ禍を経て、「こらっせ」の他のプログラムの重要性を再認識させられるとともに、リフレッシュプログラムが実施できないと賛同をお願いすることができず、財政が逼迫することも経験しました。そこで、昨年からは、11年に渡る活動の中で多様化してきた「こらっせ」の活動全般に賛同をお願いしています。

2023年度の主な活動予定は以下の4つです。①リフレッシュプログラム：昨年からご縁のできた福島の子どもの施設の小中学生を8月初めに山北・横浜に招待します。②福島応援・スタディツアー：春休みに「こらっせユース」が福島に行き、子ども関係施設でボランティアをすると同時に原発事故の被災地へ赴き事故のことを学びます。③山北プロジェクト：神奈川の子どものために自然豊かな山北を訪れてもらい、学び、遊んでもらいます。④その他：講演会の開催、311子ども甲状腺がん裁判の支援、省庁交渉などを通じて子どもの健康、人権を考えることに取り組みます。

2023年度のキックオフミーティングは、5月14日（日）14時からオンラインで開催します。講師は「こらっせ」が今年力をいれたい子どもの健康・人権のテーマにふさわしい「311子ども甲状腺がん裁判」の弁護団長、井戸謙一さんです。井戸さんは、2006年住民の訴えを認め、志賀原発の運転差し止めの判決をだした裁判長として著名ですが、2011年弁護士になられてからは住民の原発差し止訴訟の代理人を務めると同時に、「福島集団疎開裁判」、「子ども脱被ばく裁判」、「311子ども甲状腺がん裁判」と子どもの被ばく訴訟に取り組んでいられます。私たちのような小さな団体の講演依頼も受け入れてくださり、彦根から駆けつけてくださいます。ぜひ、ご参加くださいね。

福島市で子ども食堂を運営する江藤大裕さんが講演 「子どもはみんな育てる」を訴える

1月29日(日)、福島市でこども食堂「よしいだキッチン」を運営している江藤大裕さんをお迎えして、第3回目のオンライン講演会が開かれました。タイトルは「福島からの報告：子どもたちをつなぐで包み込むまちへ」、コーディネーターには前回に引き続き加藤彰彦さんにお出まじいただき、司会はこちらユースの佐藤聡さんが担当しました。

江藤さんは大阪の西成区出身で、18歳のときに阪神淡路大震災を体験し、大きな影響を受けたそうです。大学を出てから世界各地を旅行し、福島の郡山に移り住んだところで3.11に遭遇、NPOの「ビーンズふくしま」で活動することになりました。「ビーンズふく



しま」は、1999年に不登校のこどものためにフリースクールを設立したことからスタートし、子ども・若者支援のさまざまな活動を行っている団体で、江藤さんは若者の居場所づくりに従事しながら、2018年に「よしいだキッチン」を立ち上げ、福島市の子ども食堂ネットワークを組織してきました。

講演では、「ビーンズふくしま」の歴史、「よしいだキッチン」の活動の趣旨が、動画を交えながら報告され、コロナ禍でも、ドライブスルー型お弁当配布、あおぞら駄菓子屋さん、夏祭り・1分間の打ち上げ花火などの取り組みの工夫が紹介されました。

「よしいだキッチン」を始めるきっかけは、小さいころから虐待を受けていた子どもが、「自分の気持ちをきいて寄り添ってくれる人になりたい」と話してくれたことだそうです。困っている子どものサインを見逃さないことが大事だというお話は印象に残りました。

子どもの居場所からみんなの居場所へ

また、子ども食堂はただ食べるだけの場所ではなく、地域のなかで子どもの居場所になることを目指すとして、地域の人たちを巻き込んだ活動へと発展させていく展望が語られました。行政を含めたさまざまな人たちとつながり、サポートを受けるとともに、地域の人たちにとっても居場所となることが江藤さんの目標なのでしょう。

オンラインでの参加者は50名ほどになり、終了後にたくさんの感想が寄せられました。「子どもはみんな育てる」という考えがすばらしい、地域の課題に多様な人たちが一緒に取り組み、解決に向けて地域づくりをしている福島の試みに感動した、といった感想がありました。(金子文夫)

「東日本大震災かながわ追悼の夕べ」に今年も参加

東日本大震災と福島原発事故から 12 年が経ちました。≪3.10 東日本大震災かながわ追悼の夕べ実行委員会≫主催、大震災と原発事故の犠牲者の鎮魂を祈る追悼イベントは横浜市中区「象の鼻パーク」で開催されました。死者、行方不明者、発災後の災害関連死の方々を追悼するこの式典は、2014 年より毎年継続して開催され、今年も 10 回目です。多くの人の人生を変え、多くのモノを奪った 3.11 に向き合い、神奈川に避難してきた方がたと東北につながろうとする神奈川の市民がともに開いた追悼の夕べであり、よりよい未来を願っての祈りの場となっています。



今なお避難生活を続ける方々、消せない放射能の影や先の見えない事故終息への不安。さらには 300 人を超える子どもの甲状腺ガンなど「核災害」からの復興は容易でない事を実感させられました。「福島子ども・こらっせ神奈川」は、福島につながり、若者と一緒に活動を進める団体として招待を受け、会場内のテントブースで活動紹介をさせていただきました。（藤井あや子）

～ 311 子ども甲状腺がん裁判～

「この若者達だけを闘わせてはなりません」(井戸弁護士団長の言葉)

3 月 15 日(水)に、東京地裁において第 5 回目「311 子ども甲状腺がん裁判」が開かれました。支援者の熱意に押され、今回から会場が小法廷から大法廷に移りました。傍聴席も増えたにも関わらず、法廷に入り切れない傍聴希望者が裁判所前に溢れました。

そして、7 人の原告の最後の 2 人となった男女の意見陳述が始まりました。やはり涙無くしては、この若者達の訴えを聞くことは出来ませんでした。

希望と可能性に満ちた未来が待っているはずの若者達が、これからの生涯を、癌の治療と再発の恐怖に怯えながら生きていかねばならないその過酷さ。首に刺される太い穿刺細胞診の恐怖や声も上げられないほどの術後の苦痛、何より医師から最初に告げられた「これは原発事故とは関係ありませんから」というこの一言。勉学も、仕事も 結婚もあきらめて。

日本政府は「年 20 ミリシーベルト以下は健康被害がない」という方針を打ち出しました。それゆえに「甲状腺がん」を被曝のせいと認めることは国の政策の過ちを示すこととなり許されないのです。

こんな理不尽を若者 7 人に負わせていいのでしょうか。(錦織順子)

佐藤聡さん（こらっせユース）インタビュー（「パルシステム」に掲載） 寄り添い続けられるつながりを。

～あの日から 12 年、いま、ひとりの大学院生が考えること～

「あのとき、突き上げるようなものすごい揺れで立っていられなくて。みんなパニックでした」

当時を振り返るのは、いま仙台市の大学院で検査技師の勉強に励んでいる佐藤聡さん、24 歳。東日本大震災発生時は、生まれ故郷の檜葉町の小学校に通う 6 年生でした。

そして、町からおよそ 20km 北にあった東京電力福島第一原子力発電所が爆発。佐藤さん家族を含む町民全員が、着の身着のままの避難生活を余儀なくされたのでした。

「福島県内の体育館や旅館、仮設住宅を数えきれないほど転々となりました。中学入学のときは会津にいました。でも 1 週間でまた転校したんですけれどね……。檜葉にいたときは原発って安全だ、安心だって聞いてたんですけど、あれはなんだっただろうなあ、って思った記憶があります」

長引く避難生活、次第につのる孤独感

「結局、同じ沿岸部のいわき市の仮設住宅に落ち着いて、そこで 6 年間、家族 5 人で暮らしました。父はもともと原発関係の仕事をしていましたが、震災後は退職したものの廃炉の作業員が寝泊まりする宿舎で仕事を見つけたり、原発までの送迎バスの運転手もしたこともあったかな」

決して広いとは言えない仮設住宅の中で多感なときを過ごした佐藤さん。友人関係、恋愛、将来のこと、家族とのこと。悶々と思い悩むことも多々ありました。

「中学の時、不登校になったこともあって。お金のこともあったのかな、ちょうど両親が離婚直前まで関係が壊れかけて。家に居場所がないっていうか、だんだん孤独になっちゃったんですよね」

そんなとき、同級生から神奈川県「福島子ども・こらっせ神奈川」が主催する保養プログラムへ誘われます。2 泊 3 日の久々の旅。不安と期待で訪れたそこでは、地元の温かい大学生たちの出迎えとともに、離れ離れだった級友たちとの思いがけない再会が待っていました。

「うれしかった。ずっと溜まっていたものが一気に噴き出して、消灯してからも布団に入りながら、バラバラだった毎日のことをお互い話しまくって。それをきっかけにちょっとずつ孤独から脱出できたんです」

寄り添い、声を聞き、あたたかく気遣える関係へ

いま佐藤さんは「こらっせ」の大学生メンバーとして、福島県の子どもたちのサポートにボランティアで取り組んでいます。「もどかしさを抱える彼らの気持ちが自分なりにわかる気がして。かわいそうだから支援する、じゃなくて、今悩んでいることを聞く、辛いことを聞く。どれだけ寄り添い続けられるかが大事なかなと思ってます」佐藤さんが医学の道を志したことには、6 歳下の弟さんの存在が大きかったといいます。

「生まれた時から全身が四肢麻痺の脳性麻痺なんです。いい弟ですよ。家族みんなで支え、地元の人たちにも支えられていました。避難生活中も周囲の方々はあたたかく気遣ってくださいました」だからこそ、恵まれない人たちに対してはどうしたら力になれるのか、ずっと佐藤さんの中ではテーマだといいます。

「パルシステムさんを含むさまざまなお支援もあって、私たち被災者はこの 11 年間、暮らすことができました。でももしかしたら、まだまだ孤独に思い悩む方がいるかもしれない。新たな寄り添いが、この応援を通じて生まれるなら、私も弟もうれしいです」（一部修正しました）